

| | |
|--------------|--|
| Title | 北陸先端科学技術大学院大学附属図書館の24時間開館 |
| Author(s) | 中本, 悦子 |
| Citation | 専門図書館(227): 14-19 |
| Issue Date | 2008-01-25 |
| Type | Journal Article |
| Text version | publisher |
| URL | http://hdl.handle.net/10119/4172 |
| Rights | 中本 悦子. “北陸先端科学技術大学院大学附属図書館の24時間開館”. 専門図書館. No. 227, (2008.1), 14-19. ここに掲載した著作物の利用に関する注意: 本著作物の著作権は著者に帰属します。 |
| Description | |

北陸先端科学技術大学院大学附属図書館の24時間開館

中本悦子(北陸先端科学技術大学院大学附属図書館)

1. はじめに

1990年10月に開学した北陸先端科学技術大学院大学は、わが国で最初に創設された独立大学院大学で石川県能美市にある。24時間開館が特徴の1つである附属図書館(以後「図書館」という)は、1996年4月に開館した。24時間開館については、すでに市村らが記事や発表などでそれぞれ紹介している^{1).2).3).4)}が、2008年3月末には12年を経過することでもあり、ここで1つの区切りとして開館前とその後の活動についてまとめることは重要ではないかと考えた。図書館の利用環境整備の一環として、24時間開館の事例を紹介したい。

2. 図書館の概要

図書館の建物は、鉄筋コンクリートの地上3階建てで、述べ床面積は事務部門を含めて、2,196㎡である。24時間開館ということで、資料にアクセスしやすいことを配慮したため館内に書庫はなく、すべてオープンフロアとなっている。

図書館の規模は小さいが、エントランスホールの廊下と壁及び中央のアトリウム(吹き抜け)の壁にはイタリア産の天然大理石が用いられ、しかもアトリウムのトップライトには、一見ステンドグラスのように見える九谷焼の陶壁があって訪れる利用者の目を楽しませてくれる図書館(写真1)である。

図書館の職員は、常勤職員8名が平日8:30~17:30、非常勤職員1名が8:30~15:30の勤務である。図書館の受付カウンターには、平日8:30~17:00は職員1名を交代で配置し、平日17:00~20:00は学生のパート職員1名(雇用5名)を配置している。時間外と土・日・祝日の休日は無人となる。また職員一斉休業がある8月の3日間、創立記念日(10月1日)並びに年末年始(12月29日~1月3日)も無人となる。

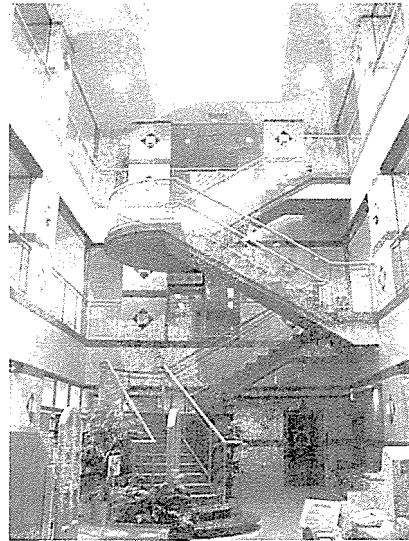


写真1 図書館内部

- ・閲覧席数:141席
- ・蔵書冊数:122,797冊(2006年度末現在)
- ・所蔵雑誌種数:1,225種(2006年度末現在)
- ・利用対象者:1,381人(2007年5月1日現在)
(内訳)教員数:233人、職員数:190人、学生数:958人(博士前期・後期課程、研究生等)⁵⁾

3. 図書館の基本コンセプト

開館当初から、「24時間開館」「研究図書館」「電子図書館」の3つのキーワードで運営している。

1つ目のキーワード「24時間開館」については第4章以降で詳述する。

2つ目のキーワード「研究図書館」とは、大学の教職員及び学生の研究に資することを目的とし、先端研究者のニーズに対応するために専門的・先端的学術資料を重点的に収集する図書館を意味している。つまり、あらゆる分野の資料を収集する総合図書館のような位置づけではなく、知識科学研究科、情報科学研究科及びマテリアルサイエ

ンス研究科に必要な学術資料を収集している。

3つ目のキーワード「電子図書館」は、いままではオンラインジャーナルや機関リポジトリ等も含まれるが、開館前後の頃はこういったものはまだなかった。このときの電子図書館構想は、1994年7月の評議会において了承された「本学図書館機能の1つとして『電子化された学内蓄積データベースの体系的整備を図る』」ことであった。データベース化の対象は種々考えられたようだが、著作権問題をクリアしやすい、学位論文一本に絞られた。そして1996年7月に「学位論文データベース」⁶⁾として学位論文の全文を全国に先駆けて公開した。

基本コンセプトである3つのキーワードのうち、「研究図書館」は「24時間開館」として場所と資料をいつでも提供し、「電子図書館」は「24時間開館」と同様に、学術情報にいつでもアクセスを可能とし、また「研究図書館」と「電子図書館」は、紙媒体だけではなく電子媒体の学術情報を併せ持つハイブリッド型の図書館を目指すものである。これら3つのキーワードはトライアングルの関係にあり、図書館サービスを展開する上で常に念頭におく必要がある。

4. 開館前における暫定図書館と図書館整備計画

法的な図書館の設置は、本学の開学と同じ1990年10月であり、翌年の1991年には図書館の事務を掌る学術情報課(現・学術情報サービス室)が設置された。現図書館の建物が建てられるまでの間、情報科学研究科棟の一部を暫定図書館としていた時代があったことに少しここで触れておきたい。

本学が受け入れた最初の学生は、1992年4月に入学した情報科学研究科の博士前期課程の学生であった。このとき、暫定図書館においても24時間の終日利用を基本方針としていたことが当時の資料に残されている。

磁気カードの学生証・身分証⁷⁾を使用しての構内建物のドアの開錠のみならず、暫定図書館への入館やセルフサービスによる貸出手続きは、この当時からすでに実施されており、この方法は現

在も続いている。このときの貸出は、5冊・1ヶ月間であったが、貸出の更新・予約サービスはまだ取り扱っていなかった。

24時間の終日開館の決定までに及ぶ詳細な記録は残念ながら見つからなかったが、1993年5月の「図書館建設の基本事項」の整備計画の資料によると「本学は、学部を持たない大学院大学であり、研究者対応の図書館であり、図書館を含む大学施設の終日利用を基本とする理念に基づき施設及び設備等の利用環境を整備する」とし、施設・情報環境については、①24時間利用を原則とする、②身分証明書による入退館システムを用いる、③所蔵検索等の基本事項は各個人用ワークステーションによる対処を基本とする、④図書資料は開架書架配架を原則とする、⑤電子メールの活用によりカウンターによる業務を最小限度に抑える、⑥貸出のセルフサービス対応の強化を図る、などが挙げられている。また同様の事項が図書館連絡会の議事録やメモ等に見られることから、再三再四に渡り24時間開館体制の確保について議論され、図書館建設計画に盛り込まれたようだ。

図書館の24時間開館を実施するにあたり、時間外や休日について「無人」としたのは「図書館の24時間利用にあたり、職員を配して終日利用サービスを実施することは困難」という結論に基づくものだった。とはいっても「時間外及び職員不在時には特別の監視が必要」であった。この「無人」開館を含む24時間の図書館利用を可能とするために、利用者によるセルフサービスを前提としたシステムでかつ無断持出しを防止し、資料の管理に万全を期す機器構成が必要不可欠と考えられた。

そして建物自体は光熱水料の節約を考えて、トイレ・エレベータ・階段を集中させ、さらにトイレは1階のみとし、館内の照明は無人運用対応の人のセンサーを用い、空調は自動制御とし、しかも火災や地震などの緊急にも備えた設計とすることが当時の施設課の職員と打合せられた。

また、当時から一般利用者のことも視野に入れていたようで、図書館の受付カウンターの配置は1箇所とし、「セキュリティ内の利用者はもちろん

んのこと、セキュリティ外の利用者とも対面できること」が要望された。多くの図書館の場合、図書館ゲートを通ると受付カウンターがあるが、当館の場合は、受付カウンターにレファレンスなどで立ち寄るだけならば、図書館ゲートの通過は必要ない(写真2)。そのため受付カウンターの対面者数は、入館者数にはカウントされないという欠点があるが、なぜこのような配置にしたのか、今回古い資料を調べてようやくその謎が解けた。図書館は完全に独立した建物ではなく、近接する学会館及び知識科学研究科棟へは廊下で結ばれており、受付カウンターに行き先を尋ねに来る来訪者も多い。受付カウンターは、総合案内のような役割も求められていたといえる。

5. 設備と機器の主な変遷と現状

24時間開館に対応するために下記の設備や機器を導入している。

(1)セキュリティシステム

- ①入退館管理システム (日本ハルコン)
- ②ブックディテクションシステム (3M社)
- ③図書館監視システム (松下電器産業)

①の図書館ゲートは、不具合が頻繁となったため2006年1月に現機種に替えた。③の以前の機器は、ビデオテープによる録画方式だったため週1回のテープ交換や見たい画面への巻き戻しが面倒であったが、2002年3月にデジタル録画方式の現機種に替えてその煩わしさは解消した。また1階



写真2 図書館ゲートと受付カウンター

フロア2箇所のみだった監視カメラは、買替え後、毎年増設し、現在は館内14箇所にある。事務室内においてモニター2台で監視している(写真3)。

(2)自動貸出装置 (ABC-II (住友スリーエム))

装置のトラブル続出により2002年3月に現機種に替えた(写真4)。最初に装置を導入したのは1997年4月からだが、それまでは業務用の閲覧システムのUNIXマシンを利用者にセルフサービスで使わせていた。なぜ装置の導入が開館から1年も遅れたかは、以下の経緯があった。

現在公共図書館などで普及しているICタグ⁸⁾は、1995年頃はまだ日本では開発されていなかった。あるとき日本の某企業から、外国メーカーとの業務提携によりRFIDを媒体とする図書管理システム開発の話が持ち上がり、その導入のためにその企業と何度も打ち合わせをした。しかし、外国メーカー側の開発が思わしくなく想定していたシステムはできないということになった。そのため1996年秋には、従来型の自動貸出装置導入に方向転換をした。

せめて現在のようなICタグが開発されていたらと考えると残念でならないが、ICタグのデータ保障期間がまだ10年という報告⁸⁾もある。今後の技術の発展に期待したい。

(3)図書館システム

2006年12月に富士通iLiswaveJ (MyLibrary登録) にリプレースした。



写真3 監視モニター (上段左・下段) と図書館ゲートモニター (上段右)

(4)照明と空調

館内の照明は、人感センサーによる自動照明でブロックごとに人の動きにあわせて作動する。自動照明は、当初20:00以降に作動するように設定していたが、2003年12月に省エネのため、閲覧室等も含め24時間モードに変更した。

館内の空調は、夏季・冬季のみ大学全体のコントロールにより平日の8:30から20:00まで運転される。しかし、2階・3階の閲覧室及び2階のAVメディア室は単独空調になっているので手動により24時間・年中利用ができる。ただし平日の時間外(18:00から翌朝8:00まで)と休日は、消し忘れ防止のため2時間ごとに停止するため、引き続き利用する場合は再度スイッチを入れる必要がある。

(5)その他

火災等の非常時には、各階非常口のパニックオープンや防火シャッターの自動降下などの機能が施されている。なお、夜間・休日は防災センターの警備員による巡回がある。

6. サービスの現状

基本的なサービスは24時間利用可能である。

(1)貸出・返却

- ・貸出：自動貸出装置によるセルフサービス
- ・貸出冊数：無制限
- ・貸出更新：原則1回(勤務時間内)⁹⁾
- ・予約：MyLibraryにあるOPACから利用

- ・貸出状況：MyLibraryにアクセスして参照
- ・返却：原則としてブックポストへの返却
- ・その他：返却期限日お知らせメールの自動送信

(2)文献複写

学内利用者は研究室配布のコピーカードにより24時間可能¹⁰⁾

(3)相互利用

他機関から取り寄せた文献複写の受渡しは、24時間対応のボックス配布(写真5)(メールで到着のお知らせが届いたら、図書館受付カウンターにあるボックスの中から本人の氏名が書かれた封筒を持っていく方式)¹¹⁾

(4)レファレンス

対面またはメールでの問合せに対する回答は勤務時間内

(5)オンラインサービス

開学当初から学内LANが整備されており、学生には概ね1人1台のワークステーション(あるいはWindowsやMac)が提供されているので、研究室からOPAC、電子ジャーナル、各種データベース、各種申込み等の利用が24時間できる。

(6)その他

休日等の新聞の配架については、最初に読みたい人に新聞をブラウジングコーナーまで運んでもらう方式で運用している(写真6)(2004年度に学生ボランティアによる配架を実施したが、1年間しか人が集まらず、現行の方式に変更)。蔵書



写真4 自動貸出装置



写真5 文献複写用ボックス



写真6 休日分の新聞用ボックス

点検や工事などの際も臨時休館はせずに、研究の妨げにならないよう部分的な利用制限で対応している。

7. 一般利用者への公開

一般利用者への公開は1996年4月から開始した。図書館利用証があれば、学内者同様に24時間365日利用できる。貸出は2001年11月からサービスを開始した(5冊・14日間)。

図書館利用証の受渡しは当初次回来館時としていたが、2003年3月に即日交付とした。また同年7月には図書館利用証の利用期限を当年度末としていたのを翌年度末にした。これらの改善は利用者の利便性を考慮したためだった。さらに2004年3月以降は、地域や年齢による制限も無くし、現住所が確認できる書類さえあれば交付している。

また一般の図書館利用証は2007年10月から磁気ストライプと非接触式のIC併用カードに変更になったことにより、時間外に建物に入るための暗証番号は不要となった。

なお、図書館の入館ゲートは、ICカードまたは従来の磁気カードでも入館できるように装置の改良をしたが、自動貸出装置は従来どおり磁気カード対応のままである。

図書館利用証の所有者数は、2007年12月1日現在635人である(2000年度までは毎年90人前後であった)。

8. 夜間・休日の利用

昼夜別の入館者数の割合は、昼間を8:00~20:00とし、夜間を20:00~8:00とした場合、全体の約3割から4割が夜間の利用であり、その大半は学生の利用である。また過去5年間の推移(図1)を見ると、教職員・学生の夜間の利用は2006年度が最も多い。しかし、昼間の利用は2004年度から減少傾向にある。その理由としては、外国雑誌のオンラインジャーナルへの切替えも一因していると思われる。逆に、一般の利用は2004年度から昼夜とも急激に増加している。これは、第7章で述べた改善により一般利用者数が増大したことが要因と考えられる。

平日・休日別の入館者数の割合では、全体の2割が休日の利用である。また過去5年間の推移(図2)を見ると、教職員・学生は平日・休日とも利用が減少しているのに比べ、一般の利用は、こちらも2004年度から平日・休日ともに増加が著しい。

なお、入館者数はカード利用による入館ゲート通過のべ人数であり、見学者数は含まれない。

9. 今後の課題

夜間・休日の無人の時間帯において提供できないサービスや利用者のマナーの問題も確かにあるが、それよりもまず人や物に対するセキュリティの確保が最大の課題だろう。また時代の趨勢に合わせて施設・設備も改善する必要がある。こうしたセキュリティ対策は、利用者に窮屈感を与えずにすぎてもいけないし、緩すぎてもいけない。さりげ

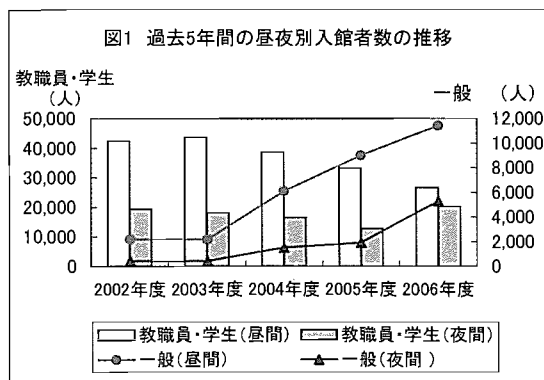
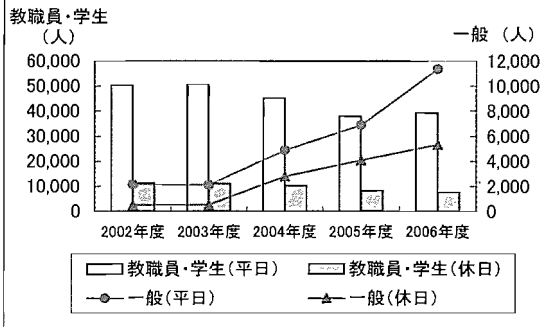


図2 過去5年間の平日・休日別入館者数の推移



なく強化させるといふ、そのバランスが難しい。

10. 終わりに

当館の貴重図書室には、「解体新書」と「重訂解体新書」がある。江戸時代において最も完備した解剖書の「重訂解体新書」よりも、本文だけを訳した¹²⁾、それも不十分さを承知の上で、日本で初めて出版した「解体新書」の方が数段輝いている。不十分でもまず前に出てみる勇気が必要なることを示唆してくれる。

程度の差こそあれ、本学の24時間開館も不十分さを承知で始まった。当時の職員の勇気には驚かされる反面、24時間開館が実現されていなかったら、この図書館はごくありふれた図書館でしかなかっただろう。そう考えると当時の職員の方々には感謝したい。それを引き継いだ私たちは、先人諸氏の思いとは裏腹に、「24時間開館」にしても「学位論文データベース」にしても“当然のこと”と

してやっているにすぎないが、本当はすごいことなのかもしれない。

(なかもと えつこ)

参考文献・注

- 1) 市村昇一. 新館紹介：北陸先端科学技術大学院大学附属図書館. 大学図書館研究、51、1997、p.85-89
- 2) 野村洋子. 北陸先端科学技術大学院大学附属図書館における24時間開館の現状と問題点. 大学の図書館、16(9)、1997、p.159-160
- 3) 中本悦子. 24時間開館サービスの現状と課題. 第18回大学図書館研究会集録、2002、p.52-55
- 4) 中本悦子. 北陸先端科学技術大学院大学附属図書館：24時間開館と地域開放. 情報管理、46(3)、2003、p.183-184
- 5) 大学院大学のため「学部学生」はいない。
- 6) 「JAIST学術研究成果リポジトリ」(2007年5月公開)に移行した。
- 7) 2007年10月から磁気ストライプに加え、Dual Felica IC内臓の接触式・非接触式カードに変更した。
- 8) 竹内比呂也. 図書館とICタグ：現状とこれから. 専門図書館、225、2007、p.94-98
- 9) MyLibraryからの更新は調整中
- 10) 私費による支払いは勤務時間内
- 11) 借用資料と私費による文献複写の受渡しは勤務時間内
- 12) 酒井シヅ. 新装版解体新書 講談社 1998

24-Hour Services at the Japan Advanced Institute of Science and Technology Library
(By Etsuko Nakamoto, The Japan Advanced Institute of Science and Technology Library)

The Japan Advanced institute of Science and Technology opened a library in Nomi City, Ishikawa Prefecture in April 1996. The library emphasizes three basic innovative concepts: 24-hour service, research facilities and digital media. The library has focused on these three concepts ever since its opening. This article presents a brief history of the library's origins leading up to its official opening, and it highlights the library's 24-hour services, which are also available to the public.